
東方薬師見聞録

五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方薬師見聞録

【Nコード】

N9047Y

【作者名】

五月雨

【あらすじ】

知らない間に、というか気がついたら見知らぬ森の中に飛ばされていた。

彼は、自らの名前すらを思い出すことができなくなっており、その場で自分のなまえを定める、『出雲』と・・・・・・・・。。時を同じくして、神々の住まう天界は荒れていた。

新しく作った世界に間違えて人を送り込んでしまう事故が多発していたのだ。

そんな事故の犠牲者の彼は、知らない間にチートをもらい、その力

で生き抜いていく。

この物語は『人』、『妖怪』、『神』とふれあい、『世界』を、そして『歴史』を見つめながら生きる彼を描いたものである。

出雲、異世界へ飛ぶ。(前書き)

どうも、寂しがりやの五月雨です。

ソードアート・オンラインと悩んだ結果、こちらにしました。

『武器と魔法と技術と知識は使いよう』や、『僕達のIS ㊤イン
フィニット・ストラトス』とは、ちょっと違った感じの主人公で
すので、おかしいところがあるかもしれません。

何か問題があった場合は、どしどし送ってください。

では、東方の二次をお楽しみあれ

出雲、異世界へ飛ぶ。

ここは・・・・・・・・・・どこだ？

さっきまで俺は自宅にいて、和室に日本刀を取りに行った。

その後、道場に行こうと扉を開けたらこれだ・・・・・・・・・・

俺は一人、森の中にいる。

べつに他に何かをしたわけじゃない。お地藏様を蹴ったり、神社の鳥居を壊したりなんていう罰当たりな行為は一度もしたことがない。それに、神様に会ったりしたわけでもなく、なぜか森の中にいる。良く森の木々を見ると、図鑑などで見たことのあるような樹ばかりだ。

なんと言えば良いんだろうか？

えーと、恐竜図鑑とかで見えるような感じなやつ、あれだ。

んで、何で俺はこんなところにいるんだ？

冒頭にも言ったが、大事な事だからもう一回言つといた。

とまあ、そんな不運に合っている だ。

？あれ、俺。名前何だっけ？

やべえ、思い出せねえ・・・・・・・・・・。どうしたもんかなあ。

まあいいや、思い出せねえもんはしょうがねえ。新しく自分の名前ぐらい考えるか。

そうだな・・・・・・・・、苗字は後だ。

とりあえず、名前だけ決めておこう。

俺の出身は日本の島根県だった。

だから、昔の地名は出雲か石見だったわけだが・・・・・・・・。

石見なんて名前は格好悪いな。じゃあ、出雲だ。俺はこれからは出雲と名乗ろう。人と会えれば、の話だけだな。

まあ、なんだ……。腹が減ったし、なんか食うか。
出雲は、実のなった木へと歩み寄っていった。

そのころ、とある天界では……………

「ああああー……、やっちゃった。間違えて一人違う世界に送っちゃった。どうしよう」

一人の神が、パソコンのような機械の前で頭を抱えながら叫んでいた。

当然、その姿はとても目立ち、周囲の神が何事かと集まってくるありさまだった。

「どうしたの？」

様子を見にきた神の一人が、訊くと、

「間違えて違う世界に一人送っちゃった」

頭を抱えたまま、一人の神が答える。

「ああ……………。多分×××のせかいでしょ？」

「何で分かるの？ エスパー？ 某学園都市で教育受けてきた？」

「違うわよ……………」

一人の神の疑問はあっさりと切り捨てられる。

「まあいいわ。×××の世界はできたばかりでしょう。さっきからその世界に間違えて送り込む事故が多発しているみたいよ。送り込む時代は違うみたいだね……………」

「へえー……。じゃあ、アフターケアとかしなくても大丈夫かな？」

「ダメに決まっているでしょうがっつっつ」

天界に、小気味のいい、炸裂音が鳴り響いた。

「まったくもう、あいつも本気で殴ることはないだろうに。それだから男勝りとか言われて婚期を逃すんだよ。はあ……………」

×××のせかいだから能力でもつけてやれば大丈夫だよね？」

先ほどの、ミスをした神は、残像が発生するほどの速さで、キーボードに何か打ち込んでいた。

「えーと、いいや、とりあえずは『自然を操る程度の能力』にしておこう。この能力がどうなるかは、彼自信の努力によってだね。あとは、不老不死ぐらいでいいか？さあ、これでよーし」

陽気なままの声で、処理を終えた。

今後彼がどうなるうが、自分の責任だはないといわんばかりの明るさで……………。

まあ、もしこの神がそんな風に彼を扱ってしまえば、先ほどの婚期を逃してしまった神から肅清を受けるであろうが……………。

出雲、異世界へ飛ぶ。(後書き)

感想等を書いていただけると幸いです。

出雲のパーフェクト恐竜狩り教室（前書き）

どうも、寂しがり屋の五月雨です。

これまで僕が書いてきた二次とちがつておちやら気が多いこの二次ですが、よろしく願います・・・・・・。

出雲のパーフェクト恐竜狩り教室

どうも、知らない世界に19歳の誕生日の日に転送された出雲だ。

まあ、このまえ暑いから風ふかねえかなあー。なんて思ったら風が吹いて、もしかしてと思って気温が下げれと念じたら本当に下がってしまつて驚いたわ。

で、まあ実験してみるべしということで雷落ちろと念じたらまじで降ってきやがった。

いやあ・・・、冗談のつもりだったからけっこう近くに落としちまつて軽く感電した。良く死ななかったと思うよ。

で、どうやら、とりあえず人はいないらしい。

なぜかって？ かんたんだ。

そこらじゅうに恐竜がいるからだ。

H A H A H A H A H A、さすがに最初に見たときはビビッタゼ。でまあ、食われそうになったから雷落として殺した。

うん、まあ適度に焼けていてうまかったかな？

とりあえず不味くはなかった。

で、ここ最近では、つかえることに気づいてしまった能力の鍛錬に当たっているわけだ。

いろんなことを試してみたところ、俺は自然を操ることができるらしい。まあ、かなりいろんなことができる。

このまえは、恐竜の周りに酸素と水素集めて、そこに火を投げ込んでポポポーンしてきた。

かなりチートな能力だけど生きていくのには不便じゃねえどころかかなり便利だ。

だから、なんだかんだいってもこうしていきてられる。まあ、ありがてえ話だ。

んじゃ、いっちゃいますか。

雷の音で右肩の蝶・・・・・・・・・・。ミュージックスタート。

ドカードカードカード……。

「こりゃ無理だな、さすがにもとの音が酷すぎる」

あっさりあきらめましたとき。

でもまあ、雷を同時にたくさん落したり、連続して落したりで
きることが判明したな。

まあ、それだけでも良しとすつか？

さあ、メシの時間だ。次に会った恐竜よ、スマンな。

だけど、おれも生き物だ。飯を食わずに生きてはいけない。恐竜の
肉と、そこらへんに成ってた木の実で食いつないでるんだ。

肉食か……。あれは凶暴なタイプなやつだな。

そんなに恐竜に興味なかったし、凶鑑なんかと多少違うからわから
ねえけどティラノサウルスみたいな形したやつだ。

こういうやつは、味は少し悪いが、戦闘訓練にはなる。

「g o o e o e o w o w o w o o o o o o o o o o o o o o o o o o o
o o o o o」

「おいおい、少しはまともに吼えろつての……。……」

風の刃を作り出し、ティラノサウルス型の恐竜の首に当てる。

とうぜん、恐竜からしたら、あらぬ方向から衝撃を受けたことにな
り、そちらを向くが、何もいない。

「これは始めて使うんだよなあ……。……だからうまくいくか
分からんけど」

ティラノサウルス型の恐竜を中心に、風が目に見て分かるほどに回
転し始める。

それは、ティラノサウルス型の恐竜の体を持ち上げるほどとなり、
数秒後には天高くその姿が見られた。

そして……。……。

ドギヤアアアアアン

雷が、宙を舞っていたティラノサウルス型の恐竜を貫いた。

出雲のパーフェクト恐竜狩り教室（後書き）

感想などいただけるとありがたいです。

出雲、集落を見つける

ああ、ここに来てから何年経つんだろう・・・・・・・・・・・・・・・・。

時という感覚が俺の中でどんどん薄れていく。

もう、数百年ぐらい経っている気がする。どうやら、とりあえず俺は不老だ。それだけは自信を持っていえる。

じゃなきゃ、こんなに長く生きられないし、姿が全く変わらないのはありえない。

ただ一つ言えることがある・・・・・・・・・・。

自分ひとりの世界はつまらん。

確かに、恐竜がいるが、別に会話できるわけじゃない。

食う側と食われる側の関係だけだ。

自分の能力もほぼ完全に使いこなせる。

もう、何かをするにも事務的な行動になってきちゃった・・・・・・・・。

はは・・・・・・・・、

「人が懐かしいな」

夕闇に沈みかけた世界で小さな波紋が広がった。

ああ、どうも。出雲だ。せめてもの娯楽にと酒を造ってみたが・・・・・・・・。

飽きてしまった。最初の数年は良かった。

創意工夫というものがあって、久々に色々と考えさせられたりもし

た。

完成してから何年かも、味の改良とかで夢中になれた……………

だけど、それも過ぎれば飽きてしまうものだ。

と、まあ、森を歩いているわけだ。

なにも考えなしに歩いてるわけじゃないぞ。なんかこっちからいい匂いがするんだよなあ。

なんていうんだっけ？ほら、あの白黒や茶色で、角の生えた生き物。えーと、…………。まあ名前はどうでもいいが、あれを焼いたような匂いがするんだ。

なんつうんだろうな、いい匂いって感じだけじゃなくて、懐かしさも感じられる。

勘違いかもしれないが、ちょっと気になるんだよなあ……………

まあ、この時代に人間はいるわけないか。未だに恐竜の跋扈している時代だもんな。

あー、でもこのまえヘンなの居た。蜘蛛の脚持ってて、体が人で、頭がティラノサウルス、両腕がカニのはさみだった。

まじで気味が悪かったから雷で焼こうとしたら、一発で焼けなかった。

あんなマジな戦い始めてだ。

最終的にあいつの体の表面を水でぬらしてから、雷の雨を鬼のように降らしたら30分後ぐらいに止まった。

やっぱり気持ち悪かったから屍骸は水素と酸素でポンしといた。

で、結局あれなんだったんだろうねえ？

あのあと、数日後に見に行ったら屍骸がなくなってたしね。余計に気になるよ。

もしかして復活したとかだったら面倒くさいことこのうえない。ん、匂いが強くなった。

そろそろか……………。

顔を上げた出雲の前に広がっていた光景は、戦国時代ぐらいの人の
集落だった。

出雲、集落を見つける（後書き）

感想などをいただけるとありがたいです。
何気なく勢いで書いている小説なので・・・。

出雲、怪我をする

人里だ・・・・・・・・。。。

堀に囲まれた中の建物の集まりからは、子供のはしゃいでいるような声が聞こえる。

なにか食べ物を焼いているような匂いや、煙も上がっている。

戦国時代みたいな建物だが、取りあえずは人の集落だ。

いやあ、もう、縄文時代始まってたんだな。気が付かなかった。いくら山を挟んで反対側のこととはいえ気が付けなかったのは残念だな。

「つて、ちよつとまで、おかしいだろ」

やべえやべえ、おもわず独り言を・・・・・・・・。

というかまだ恐竜生きてるし。

どの教科書にも恐竜と人類が同時期に生きていたなんてこと書かれてなかったぞ。

ただ単に、まだその遺跡が発掘されていないから分かっていないのか。

それとも、その事実が判明すると問題がるから隠ぺいされているのか。

もしくは考古学者が遺跡を見つけていても年代を間違えていたり、素人が見つけたことに怒りを感じて嘘の発表を行っているかのどれかだろ。まあ、中にいるのが人ならという話だが・・・・・・・・。というか人だよな。人以外はまずあり得ないし。

「まあいいや、とりあえず門でも探して中に入らしていただくか」

「おい、門に変な妖怪が来たらしいぞ」

「なんでも人の姿をしているとか・・・・・・・・」

「妖怪も進化しているのか？」

「分らん」

「まあ、なんにせよ、汚らしい妖怪なぞという種族は」

「」「」「殺してしまえ」「」

「」「」「根絶やしにしてしまえ」「」

「皆の衆、武器をとれ」

「」「」「応っ」「」

塀の内側のある広場のにいた男達の会話より、抜粹・・・・・・・・。これが村長を中心とする、人里の大多数を占める大衆の意見であった。

「う、ううううるさい。さっさと森に帰れ妖怪」

「だから俺は妖怪じゃなくて人間だって、失礼だな」

どうやら俺は、森から来たせいで妖怪と間違われているらしい。で、自分は人間だって言っても信じてもらえず、弓まで向けられている。ありさまなのだが・・・・・・・・。

「いい加減に信じろよ。それにそんな構え方じゃ矢を放てねえだろ。自分に弓の弦が引っ搔る、だからもう少し体から弓を離して構えろ。そうすれば上手く射れるようになるぞ」

「だ、ま、れー。さっきからお前のせいで調子が崩されっぱなしだ、妖怪。さっさと森に帰れ」

この弓すらともに構えられていないバカな銀髪っ娘の門番に入れさせてもらえない・・・・。時間の無駄だ。まあ、バカなこいついじるのも楽しいんだけどな。

というか……………。

「おまえ、戦いに関してはド素人だろ」

「!!!!」

どうやら、凶星みたいだ。いやあ、にしても見ていて楽しいな。顔を青くしたり、赤くしたり、冷や汗を物凄い勢いでかいたり……………。

「怪人20面相？」

「違うわよ！」

あんまりこうやって戦いのさなかに喋るのは戦慣れしているものとしてはおかしいんだよなあ……………。だから素人ってばれだし。それに少しはポーカーフェイスを身につけないとそこをつけ込まれるぞ。

「お前面白いな。名前は？」

「妖怪が普通に名前を訊くなあああああ」

本当に馬鹿だ……………。

まあいいか、みんながみんな感情を殺すようなやつだと誰も楽しくないしな。こういう奴がいたほうがみんな楽しいだろ。

「ふーん、俺は『人間』の出雲だ。よろしくな」

「よろしくないわっ。あんまり人間のふりをすんな。妖怪ってばれだし」

「だから妖怪じゃないっての……………」

前言撤回、馬鹿すぎても大変なだけだ。

はあ、誰か俺を人間だって認めてくれる奴いねえかな？

そろそろ中に入りたいし、腹も減ってきた。

「なあ、いい加減に？かはっ？」

何で俺の脇腹に矢が刺さってんだ？あの銀髪は射ってねえ。じゃあなんで？

ヤバいな……………脇腹の痛みが半端ねえ。

血もどんどん流れてる。この状態で森の中に入ったら、恐竜や妖怪を引きつけて、怪我の影響でロクに戦えずに餌になって終わりか……………。

・・・。

「永琳、下がっておれ。後は我々がやる」

「そ、村長？何故ここに・・・」

「お前が妖怪を殺ってないって聞いたからな」

「阿草^{あぐさ}さんまで！？」

「俺達もな・・・」

「な、なんでみなさんが」

そうか、あの銀髪っ娘以外の里の奴が来たのか。それで妖怪と勘違いされたままの俺は射られた、と。

それもだが、妖怪だからって普通に殺していいもんかよ。俺だって襲われた時しか妖怪は殺してないぞ。恐竜は襲われた時と飯の時だけだな・・・。

「行きなさい、あなたがもし本当に妖怪でないのなら早く逃げて」

「何を言っておる永琳。人間はこの里にしかおらんのだぞ」

「「「「そうだ」」」」」

へえ、あの銀髪っ娘、永琳っていうのか・・・。

「わりいな、永琳とやら。森に逃げさせてもらう」

それだけ言くと、出雲は森の方へと逃げだす。

「永琳、何をしておるのだ。ええい、皆の衆、射れ、射るのじゃ」
村長が喚くとともに、村長に追従していた男衆が矢を射るが、しっかり狙えていないのか、見当違いの方向へ飛んでいくものすらある。そして、その間に出雲は森の中へと入り込んだ。

「やばいな。意識がもうろうとしてきやがった・・・。はは、森の中に逃げて最期・・・か。。まあ、あいつらに首をとられるよりはマシか。永琳とかいうのには悪かったな。過ぎたことは悔やんでも無駄か・・・」

ははは、参ったな。こりゃ。あっちの藪がガサガサと揺れてやがる。
もうなんか来たか・・・。

「お、おい。大丈夫か人間。おい、誰か来てくれえ」

俺が最後に目にしたのは、不思議な格好をした人型の生き物だった。

出雲、怪我をする（後書き）

早いかもしれませんが、永琳出してみました。

というか多分ですけど口調違いますよね？

原作を実は持っていないので分からないのですが、取りあえずの設定は、昔だから。ということにしておいてください。

感想など頂けるとありがたいです。

ついでに東方のキャラの口調を教えていただけると嬉しいです。

どうやら鬼の屋敷か？

「まだあの人間は目を覚まさないの？ンプッ」

「ああ、しかしなあ・・・・・・・・・・。ゴクッゴクッゴクッ、何で人間なんか助けたんだ？」

「ぷふぁー、さあなあ・・・・・・・・・・。なんかあいつは他の人間と違う気がしたんだ」

「なるほどな。にしてもングングッ、目覚めるのが遅すぎないか？あの日からもう一週間は経つだろう？」

「いや、今日で10日目、ふう」

さつきから意識がだんだんと戻ってきた。

けどまだ、目を開くことができない。

んで、どうやら頭の方に居る奴らの話を聞いていると、もう10日も経ったんだとか・・・・・・・・・・。

俺良く寝てたなあ、そんなに。

それに・・・・・・・・・・、『俺は生きています』。

まあ、話を聞いている限りの感じからすると、この人たちに助けられたみたいだが。この人たち以外にも、あちらこちらでドタバタと走ったりする音が聞こえてきている。

別の集落の人間に助けられたのかって思ったが、どうやら違うようだ。

妖怪かなんかだろう。妙に酒臭いから鬼か？

どうやら俺を食べるつもりではないようだし、もう少しゆっくりさせてもらうか・・・・・・・・・・。

俺の意識は、ものの数秒もかからずに再び深き暗闇へと吸い込まれていった。

「さっきほんの少しの間だったけど意識が戻っていったな」

「ええっ！？なんでその時に教えてくれないの、葉華ようかあ」

葉華と呼ばれた二つの角が生えた少女は眉をひそめると、自らの正面に居る少女におまえなあ、といってからじぶんの考えていることを伝える。

「美月みつき、おまえは目が覚めたばかりのこいつに酒飲ませる気だっただろ」

「何か悪いの？」

美月と呼ばれた角が一本の少女は、何がおかしいの、と表情かおに書きながら首をかしげる。そんな様子を見て葉華が額を抑えても、自分のどこが悪いのかを自覚していないようだった。

「こいつは私たちみたいなの『鬼』という種族じゃないんだぞ。病み上がりに酒なんて無理だ」

「ええー、そんなあ」

「四天王なんだから少しは知恵をつけろ」

「知恵が無くても勝てるもん」

ほお、と葉華は小さく口に出すと、顔にどこか悪戯が好きな子供のような表情を浮かべながら、美月を見る。それと同時に彼女の手は何やら怪しい動きになり・・・、葉華は美月へ飛びかかり、押し倒した。

葉華の手は美月の衣をはぎ取り、彼女の素肌に触れる。

「ひゃっ、や、やめっ」

美月は抜け出そうともがくが、葉華はいつさい動かず抜け出すことができない。

葉華の指は、美月の素肌を舐めまわすように素早く蹂躪する。しか

鬼には準うつ病患者がいるらしい。(前書き)

慣れない携帯投稿

鬼には準うつ病患者がいるらしい。

どうも、出雲だ。

また目が覚めたから今度こそ起きようと思って上体を起こしたんだが………どうしてこうなった。

俺の目の前で二本角が生えた女子の鬼が着替えている。

そして、目が合ってしまったようだ……。まあ、とりあえず。

「ここはどこだ？」

あえてツツコミ(Ⅱ・ω・)／は入れないことにした。たぶん気にしたら負けというやつだろうからな。

「きやああああああああああ」

どうやら意味はなかったらしい……。………
………はあ、残念だ。

「じゃあここは鬼たちがすむ山の屋敷の1つなのか」

「あ、ああ。うん、そうだ」

手を後ろで縛られた1人の黒髪の青年と、顔をどことなく赤く染め上げている二本の角を生やした白髪の少女が、とある屋敷で対話をしていた。

「ところで……。この縄、いつになったら解いてくれる？」

「ほ、解いてなどやらん！」

「いくらなんでも酷くないか？」

「うるさいケダモノ。私の裸を見て発情しおって」

発情した覚えはさらさらないんだがな……。何百年も1人で生きてきたせいだろうな、全然そういった感情が湧かないしな。

「別に発情した覚えは無いが？」

この前のバカ門番もそうだったようにどうせそんなに人の話は聴かないだろうが言うだけ言っておく。自分の精神衛生上のためにな。

「どうせ私は母さんみたいな巨乳じゃなければ、美月みたいなロリボディでもないさ。別に特徴できなところなんてないショボい体だし人間の男にすら発情されないのさ。悲しくなんてないさ。哀しくなんてないさ。寂しくなんてないさ。泣いてなんかないさ。悔しくなんてないさ。淋しくなんてないさ。ああ、なにもないさ。胸だっ
て平均ぐらいしかないさ……………」

「お、おい。お前大丈夫か？」

うつ病とは違うだろうしな。大丈夫なのか、鬼つてのは。まさかみんなこんな準うつ病患者じゃないだろうな？

そんな出雲が疑問を抱くなか、時は過ぎていった。

鬼の里にて

どうも、年寄りの出雲だ。

どうやら今日は鬼達の訓練場のある、山の中腹まで行くらしい。

これまでいた屋敷は、そこより300mぐらい低い位置にあった。

「なあ葉華、あそこの里の人間はなんで妖怪をいやがるんだ？おれも妖怪っぽいのを殺したことはあるが必要最低限しか殺してないぞ。それに比べてあいつ等はいまにでも殲滅しようという勢いだっじゃねえか」

助けられる前から気になっていたことだ。銀髪門番の奴は妖怪だからだっていつてたが、理由が分かん。怖がる必要もいやがる必要も俺には分からないんだが………。

というわけで葉華に訊いてみたんだが。

あ、そうそう、葉華ってのは裸を俺が見ちまった鬼だ。

「………『怨み』だ」

葉華はそういうと、表情を暗くする。先ほどもでは楽しそうな表情を浮かべていたというのに一瞬で大きく変わってしまった。

『怨み』もしくは『恨み』……、だれでも持ったことがあるのではないだろうか？

たとえば、あなたが学生だったでしょう。

自分よりも悪いことをしている奴はたくさんいるというのに、先生はあなたばかりを怒る。当然、あなたは先生と、自分より悪いことをしている奴らに対して苛立ちを覚えるだろう。一度ぐらいなら恨みまでは発展しないかもしれないが、何度も繰り返されれば………。
………。あなたはその先生と、他の生徒を『怨んだ』だろう。

社会人ならば、自分と同期で入ってきた奴が、自分よりもまともな仕事をしていないというのに、会社の上役にそいつの親がいるという理由だけでどんどん出世していく。これは生活にもかかわって

る問題だ。あなたは『怨む』だろう。

だれでも一生に一度はもつであろう小さなことだ。

しかし、それは自分個人の一生や、自分の周囲の運命を操るだろう。そして、歪めるだろう。怨みとはそういう存在だ。

そして、今は怨みによって、人間の里と妖怪は相容れぬ関係になっている。

「むかしな、まあむかしといっても100年ほど前の話だが。この山よりももっと人里の近くに草原があっただろう？」

「ああ、屋敷から見えたな」

それは広いこと広いこと、里と山の間の距離が目測で『10km』overってところだったんだが、その間100mぐらいを除けば、全部草原だった。里の周囲100mぐらいは森に囲まれてる。で、里を挟んでこの山の対角線上に当たるところは山脈になっている。そこより向こうに、俺はこれまで住んでいたんだけどな……

で、草原には、どうやら背の高い草もあるらしく、高い草は6mにも及ぶとか。

「今は30もないがクマの妖怪がいてな。当時は1500以上はいたんだ」

「おいおい、いくらあの草原とは言ってたって……。クマの妖怪を1500以上は養えないだろ」

クマの妖怪は、確かに形はクマだ。形は……。大きさは、成長したヤツが立てば大きいもので10mはあった。そんな奴が食べる量はすさまじい勢いだ。立つ鳥跡を濁さずとはいったものだが、本当にヤツらの後には何も残らない勢いだ。

「もちろんだ。むかしはもっと里も大きく、今以上に活気があったんだが……」

「ヤツらが襲ったと」

「そのとおりだ。柵を壊し里に入り込み、家を壊して人を喰らう。抵抗もしたようだが当時の武器ではとてもではないが歯が立たなか

った。一瞬のうちに里の半数以上の人間が死んだ。ヤバいと気が付いたらしく、ばらばらになって逃げ込んだ先がちょっとした林だったようだが、林の中にはクマどもは入れん。ヤツらを知っているということとは分かるんだろう？」

ああ、ヤツらはその力と体のせいで、

「森の中に入るには体が大きく、無茶をして入れば大きな傷を負うからな」

「その件を境に人里の者たちは妖怪を怨んだ。そして人の中に妖怪退治を専門にする者たちが現れ始めてな、そいつらとそいつらの加護を受けた武器を手を持った連中がクマの妖怪を狩り始めあつという間に今の数だ。おまえに放たれた矢もそいつらの加護を受けていたよ。妖怪にとっては完全な毒だが、人間にとってはそこまで危険ではない、有毒ではあるがな」

「なるほどなあ……」

そういう歴史があつたからあんなに里の連中は妖怪を毛嫌いしたのか。

って、ちょっと待て。

「その加護とやらが人間にも有毒ならなんでおれは生きてるんだ？」

「ああ、門番の銀髪娘が薬師だったらしくてね、物見の鬼が里の様子を見に行ったときに、森の中に薬が置かれてたんだよ。書きおき付きでね。で、あの門番の娘がお前のために作った解毒薬だったから遠慮なく使わせてもらったのさ」

「……。2回も助けられたのか……」

何度お礼を言っても足りないぐらいだな。

どうしたものやら……。

「お、着いたよ」

葉華の指さす方には、たくさんの鬼が一つの大きな広場を囲むようにして座っていた。

「折角だし言っておこうか。ようこそ、鬼の里へ」

大自然 『葉師出雲』 v s 鬼神 『大雉牙煉』

「ほう、そ奴が人でありながら人里に住んでおらんという・・・」

「変わった奴だな」

「あらあら、おもしろいじゃないのさ。・・・でもよくこれまで生きてたもんだねえ」

「強いんじゃないの？」

「じゃあやりあうか？」

「まずは鬼神様からさね」

「どーでもいいや、いまの人間になんて興味ねえよ」

「随分連れないこと言うじゃないかい」

鬼ってのは好き勝手な奴が多いらしい。一応、俺がここにいるのを待ってはいみたいだが、みな口々に俺の評価を始めている。まあ、鬼評価されるなんて一生に一度あるかどうかの珍しい体験だろうしひよかを受けとこうじゃないか。なんて思っていたんだが、あんまり評価というより誰から戦うかの話に変わってる気がする。

本当に気楽だな、草原のクマ妖怪が全滅すれば次に狙われるのはこの鬼達だろうに・・・。

まあ、どうせおれも家まで帰る気はないしここに居座ろうかと考えていたから一緒に人間と戦うんだろうけどな。

「で、俺は戦えばいいのか？葉華」

「はあ？あんたみたいな弱い人間が戦ったら死んじゃうよ。あたしら鬼とはレベルそのものが違うんだから」

葉華は何をバカなことを、という顔を向けては来るが・・・。

「でもあちらがたはやる気みたいなんでねえ」

どうやら俺を待っていた鬼の大半の理由は俺と殺しあうことらしい。

相手の強さを知るために相手と殺しあう。さすがは妖怪の中でも種族そのものが最高レベルの強さを誇るだけはある。

「おまえら……。バカか、こいつは人間なんだぞ」

葉華は声を荒立て、他の鬼達を帰らせようとする。

自分で行っていた限りは、葉華は鬼の四天王という奴の3番らしい。で、俺が一瞬だけ目を覚ました時にいたのが2番だったとか……。あんなちびが？とはおもったが、見かけには寄らないということだ。俺だって見た目は18とか19そこらにしか見えないが実際は600年は生きてるもんな。

「ふん、とはいえしきたりを忘れたわけではあるまい」

「そうだ、この山のしきたりをな」

「何の問題があるってんだい？」

「いや、だがこいつはにんげ「葉華よ、我らが山のしきたりを忘れたか」き、鬼神様！」

ん、どうやら四天王より上っぽい存在か……。

ってことは実力社会の鬼の世界。

鬼の頂点、鬼のかしら……。か……。。

「で、しきたりってのはなんなんだい？」

出雲は顔に子供のような笑みを浮かべながら口にした。

それを鬼神は認めると、

「鬼の強いものから順に新たにこの山にすむものは戦っていくというしきたりだ」

同じく子供のような笑みを浮かべながら返した。

二人の間に種族という怨みは存在しない。

存在しているのはただ一つ。

こいつはどれだけ強いんだ？

ただそれだけ。好奇心だけである。

「面白いしきたりだ。人のみだが挑戦させてもらおうか」

「ほう、いい度胸だな。お主、名はなんと申す」

鬼神に訊かれた質問に一瞬だけ出雲は固まる。彼は名字を持ってい

ない。否、思い出せない。だから何と言っているのかが分からなかったのだ。だが、次の瞬間には返答が決まっていた。

あいつ、銀髪門番の永琳は薬師だったな……ならかんだ。

最初のお礼は

「『薬師出雲』だ」

俺の名字にするさ、お前の仕事をな。

「良い名だな。我はこの山の頂点、鬼神の大雉牙煉だ」

「「じゃあ、おっぱじめっか」」

大自然を司るものと、鬼達の頂点はついに激突した。

古之大魔法雷

「おおおおおおおお」

周囲の鬼達が下がるより前に二人は闘いの火蓋を落とす。

牙煉がれんは右手を腰の位置に下げ、一突き。たかがそれだけ、されどそれだけ。

空気が急激に圧縮され、伸びる場所を探してそのまま飛び出す空気の砲弾と成して……。

「すごいな、ただの一突きでそれとは……」

牙煉がただの力が強いものではなく、高い技術も持ち合わせていることに気付いた出雲は体をそらして空気の砲弾をかわすと、反撃に無数の空気の砲弾を返す。

こちらは、牙煉のようにして作ったものではなく、能力で作ったものであるのだが……。

「むっ!？」

威力は牙煉の放ったものに勝るとも劣らない。鬼とはいえ、喰らえばただでは済まないだろう。

これぞ600年の年の功といえるだろう。とはいえ、空気の砲弾は最初の30年ぐらいで完全に習得していたのだが……。

牙煉は全てを紙一重でよけると、右手に妖力の弾を大量に生成し撃ちだす。

「……マジかよ」

出雲はそうは言いながらも、自らも靈力の砲弾を大量に生成し相殺するように撃ちだす。

二人の中間で、鮮やかな弾幕がぶつかり、爆ぜる。それは虹を見ているようであった。いや、虹というより多彩なオーロラだろう。一時としてまったく同じ姿は見せない。急激に姿を変えて見せたり、緩やかに少しずつ姿を変えて見せたりする。

鮮やかで、美しかった。

「強いな・・・」

誰が言ったのだろうか。牙煉だったのかもしれないし、出雲だったかもしれない。もしくは見ていた誰かだったのかもしれない。しかし、そこにいたすべての者が目の前の者を見てそう思っていた。

「少し・・・、本気を出させてもらおうか。ここまで面白い相手は初めてだからな」

「へえ、まだ本気じゃなかったのか。いいさ、来いよ。受け止めて倍返しにしてやるさ。俺が諦めない限りはな」

バチツバチツバチツバチツバチツ

牙煉の周囲から異様な音が流れる。それは、特殊な生き物いがいの普通の生き物としては、普通はならせるはずのない音。

電撃の音である。

牙煉の体には紅蓮の雷が纏わりつく。さらには、紅蓮の炎も。

「能力持ちでな、雷と炎を操ることができる。これに三十秒も耐えた者はいない。せめて10秒は耐えろ」

そう言い終わるか否かのタイミングで、さらに周囲へと放出される鬼神の妖力は跳ねあがる。

そして出雲へと殴りかかり、その腕は出雲の頭を『貫いた』・・・・・・

「きゃあああ」

「え、おい」

「うそだろ」

鬼達からもどよめきの声が発せられる。

「・・・・・・。いくら強いと言っても所詮は人間か・・・・。すまぬ、薬師出雲よ」

牙煉は顔に悲しみを浮かべながら、出雲の頭から腕を抜こうとした。

「ぬ、抜けない？」

いくら強く引こうが、牙煉の腕はまったく動かない。抜ける気配すらない。

「勝手に殺すなよ、鬼神」

その声は、鬼神の度肝を、さらには観客の鬼達の度肝をも抜いた。
なぜなら上空から声が聞こえてきたからだ。

恐る恐る鬼神が上を向くと、薬師出雲が傷一つない状態で宙に立っていた。

「な・・・ぜ・・・？」

「簡単だ。おれもお前と同じように能力もちさ。俺の場合は自然を操れる。今お前の腕が貫いているのはただの丸太だ。光という自然を操ってここに居る鬼達からは俺に見えるようにした。そして、硬度と粘着力を底上げした。だからいまお前の腕は抜けないんだよ」

「なんだと？」

牙煉の顔には何時の間にも、という疑問が浮かんでいたが、あえて出雲はそこを無視する。

「まあ、今の状況は確実に俺の方が有利だな。嘘が嫌いな鬼の前でこういう小手先の技は余り使いたくなかったけどな、これが俺流だ。さて、今度は俺の番だ」

そう言うなり、出雲の手には青白いような光が大量に集まっている。

「エンシェントマスターアスパアアアアアアアアク」

鬼神を巨大な光が飲み込んだ。

月夜の晩に語る

「いやあ、まさか負けるとは思わなかった」

「ただの偶然だ。次に最初っから本気を出されたら負けるよ」

どうも、出雲薬師だ。

鬼神大雉牙煉に勝ったから後は戦わなくていいらしい。ということ
で、これまで泊めてもらっていた葉華と美月の屋敷に居候させても
らうことになり、俺の正面には『鬼神』大雉牙煉が杯と徳利を片手
に座っている。

「満月の月夜の酒は格別だな」

「ああ……」

俺も右手に持った杯で酒を飲み、上を見上げ金色に輝く満月を見上
げる。

月……か……

月にうさぎってのは本当にいるのだろうか？

火のないところに煙は立たない。

噂にも何らかのはじめがあるはずだ。それはもしかしたら本当にう
さぎがいたのかもしれないし、月の模様がウサギに見えたからなの
かもしれない。未来では分からなかったことだ。

いない、ことになってはいる。見つからないし、月に生き物が
生きて行くのに水が無いんだったけか？俺はあんまりそういうこと
に詳しくはなかったからな。

「人か我ら妖のどちらかが月に住まえば争わなくてもいいのだがな
……」

「おいおい、どうやって行くんだよ。それに月に住めるといいう確証
はない」

「それもそうか」

フツ、と一瞬だけ牙煉は笑うと一息に杯に入った酒を飲む。

「一ヶ月後、宴がある」

「宴？宴会か？」

「いや、違う。我らこの山に住まうもの達は一年に一度の宴で序列を決める」

「ああ、戦か………」

鬼の序列、すなわち強さの順番。

それを決めるのは闘いでしかない。他に強さの序列を何で決めろというのだ。

鬼達にとっては闘いすら遊びのようなものでしかない。弱い妖怪にとっては生きるか死ぬかの大きな局面ではあるが……。

「鬼神の名は鬼しか受け継げぬ。だが、お主も参加せぬか？」

「おもしれえ、お互いに最後の二人になるまで残るぞ」

「ふん、もう一度お主と戦うのか……。いいだろう、次こそお主に膝をつかせてやろうではないか」

「何言ってる、また俺の勝ちだ」

二人は同時に杯を煽った。

「あいつは強かったな……」

「そうだね、鬼神様が負けちゃったもん」

出雲と牙煉のいるのとは別の縁側に葉華と美月は居た。

いくら小さいとは言っても美月は鬼だ。自らの体より大きな瓢箪に酒を入れてあるらしく、普通に飲んでいる。

葉華といえば、杯を持っているものの、先ほどからあまり飲んではいないわりに頬を赤く染めている。とはいえ、人間と比べれば飲み過ぎの部類に入るのだが……。

「もしかしてさあ、葉華は惚れちゃった？」

「な、バカなこというな。私が人間に惚れるわけが無からう」

「だれも出雲のこととは言っていないよ」

「っゝゝゝ!!!!!!」

「あはははははははは、葉華ったら面白いんだから」
鬼とはいえ、心は人と変わらない。

人以外の生き物であったとしても感情は持ち合わせているのは当たり前だ。

彼女らなら少女の心を……。

「多分だけど出雲は鈍感だよ。まあ頑張ってね」

「うるわいわあっ」

酒瓶を棍棒のように葉華はふりまわすが、美月は全てくるくると回るようにしてかわす。

「あはははは、葉華は可愛いね」

「死ねえ」

「あはははははははは」

彼女らの追いかけっこは陽が昇るまで続いた。

「なあ鬼神」

「ん、なんだ？」

酒ではなく、焼き魚を一人の青年と一人の鬼が一匹ずつ食べていた。

「俺を怨んではないのか？」

「何を怨む必要があるのだ？」

鬼がそう返すと、二人を静寂が包みこむ。遠くから聞こえてくる少女達のかわいらしい声を除いて。

「おまえは鬼神と言われて無敗伝説を築いてきた。それを一人の人間に崩されたことだ」

青年は箸を置き、鬼の質問に答える。

青年にとって一番気になっていたことだった。鬼神は生まれてこの方無敗だったという。それなのに、その伝説は自分が壊してしまっ

た。そして、その崩した奴と一緒に鬼神は酒を飲み、魚を喰らう。
その真意が分からなかった。

「怨んでなどおらん。友として認めただけだ」

「そうか・・・・・・・・・・」

そんな二人を満月は何時までも見守り続けた。

鬼達の宴、開宴だ。

「おいおい、この前いなかったのもいないか？」

「当たり前だ、この前は人に興味など無いと言ってこないのがいたからな」

「あっそ」

どうも、薬師出雲だ。今日はまあ、あれだ。宴だ。ようは殺しあいつてことだ。あ、でも殺すのはルール違反なんだよな。

まあとりあえず宴のためにこの前の広場に來たんだが……。

俺の言葉にもあったように数が確実に増えている。

「半刻後に開戦だ。それ以降は誰が何時どこで誰に仕掛けても問題ない。たとえその攻撃の対象が既にほかの敵と戦っているがな」

「じゃあチームで戦っている奴もあり得るのか？」

チームとは他から見では分からなくとも、取りあえず一緒に戦うかという奴はいるはずだ。

人間なら。鬼ならどうかは知らんが……。

「何人かはいるだろうな。だが、基本的にこの宴は個人の力量を図るためのものだ。数は少ない」

「……じゃあ、乱戦か」

「ああそうだ」

面白そうじゃねえか。最初っから全開でよさそうだな。

「最後に会おうぜ」

「よかろう……」

俺と鬼神は反対側に向かって歩き出した。

「宴、開幕だああああアアアア」

どこからか聞こえる鬼神の声と同時に全ての鬼が、自分の周囲にいるものに襲い掛かる。その中には老若男女の例外は一切ない。

どんなに年をとっているように見える鬼も、周囲の者に襲われたり、襲っていたりする。

「派手だねえ」

そんな中、周囲にたくさんの鬼が居ながら、誰もが攻めあぐねている人間が一人いた。

そして、その人間も周囲にたくさんの鬼が居ながら一切焦ったそぶりは見せない。それどころか楽しんでいるようにも見える。

「来ないなら俺から行くぜ？」

その人間の言葉に鬼達が身構えた瞬間、人間の前方にいた鬼が吹き飛んだ。

出雲は自分の前方にいた鬼を殴り吹き飛ばすと、右足を軸に回転するように振り返り、同時に右手をのばす。そして、右手には光が集まる。

「マスタアアアアスパアアアアアアク」

光は放たれ、先ほどまで出雲を囲んでいた鬼、さらには周囲で戦っていた鬼、総勢100名以上を一撃でのみこんだ。

「お疲れ様」

出雲は自分に向けて呟いた。

「あっちはすごいな」

「ほらほら、私達も始めようよ葉華」

周囲には、気絶した鬼が大量に転がっており、真ん中には二人の少女の鬼が服を軽くボロっとさせながらもほとんど無傷で立っていた。そして、彼女らも共闘していたわけではないらしく、相手に向けフアイティングポーズをとっている。

「ああ、どっちが勝っても怨みっこなし」

「相手を殺すもなし」

「手を抜いたら」

「絶交だ」

右手を限界まで硬くかため、二人は相手に殴りかかった。

「すごいものだな」

「ああ、すごいだろ？」

一人の鬼と、一人の人間がついに遭遇した。

二人の強きもの

「開戦といこうか……」

「ふん」

牙煉の体を紅蓮の雷と炎が包み込む。

相対する出雲の腕を風の渦が包み込む。

牙煉が音速を超えた速度で踏み込み、音速を超えた拳が出雲を捕らえるが、風を纏った腕にガードされる。

「終わりではないぞ」

「？」

牙煉はそのままさらに強く自分の腕に力をかける。

腕の紅雷と紅炎の密度が急激に上がり……

「紅の雷炎くれない舞踏」

「!!!!」

出雲に遠慮など無くそれらは放出された。

そして、それらは容赦なく出雲を飲み込む。

「くっ」

出雲は、それに飲み込まれたまま、広場の外側にあった大木にぶつかり、大木をへし折る。

「ふん、これが我の本気だ」

紅蓮の雷炎を纏った鬼神はそう呟くが、その動きには油断というものがない。砂埃を巻き上げその先が見えない大木の方角を見続ける。すぐにもう一度同じ技を放てるように構えたまま出雲が再び姿を見せるのを待ち続ける。

「マスタアアスパアアアアアア」

砂煙の中から出雲の大声が響き、煙を貫き、光の束が牙煉を襲う。

「読んでなくとも分かる、その程度のこと」

再び紅の砲が火を吹き、光の束とぶつかり、拮抗する。そして、拮抗していたところが爆ぜた。

爆風は、再び砂煙を発生させる。鬼神の周囲も例外ではなく、砂煙に包まれた。

「・・・・・・・・・・来るか」

鬼神がそう言うのと、また紅蓮の雷と炎の密度が上がり、構える。

「チエストオオオオオオ」

砂煙を突き破り、日本刀を上段に構えた出雲が鬼神の上から飛び込んできた。

「あはははは。また私の負けか・・・・・・・・」

「今回は負けたと思ったよ」

2人の鬼の少女が揃って倒れていた。

服は既にボロボロとなり、体中に痣や擦り傷などが見られる。痛々しい状態ではあるものの、二人ともどこか清々しい笑みを浮かべていた。

楽しかったや、嬉しかった。

もしくは、ありがとうだったのかもしれない。

二人は同時に何かを言ったが、それは言葉にはならず、お互いに重くなつたまぶたを下ろした。

それが鬼の友情なのかもしれない・・・・・・・・・・

「むっ」

牙煉は自らの体に刃が触れるか触れないかの寸前で両手で刃をつかみ、体からそらす。

「・・・・・・・・マジですか」

「ああマジだ」

牙煉は日本刀ごと出雲を背負投の要領でぶん投げた・・・・・・・・が、何度も同じように吹っ飛ばされる出雲ではなく、その先にあった大木に着地する。そして、膝をバネにして再び牙煉に斬りかかる。

刃は牙煉に触れる前に振りきられ、風の斬撃が飛ぶ。

「ふんっ」

牙煉は右手の正拳突きで風の刃を砕く。

出雲は、牙煉から数メートル離れた位置に着地すると届くはずも無い突きを連続して行う。それは残像が発生するほど・・・・・・・・。一つ一つの突きからは紫電が放たれる。牙煉を蜂の巣にせんとばかりの勢いで。

「さすがにこれは・・・・・・・・」

牙煉もそれに対抗しようと連続して正拳突きを放ち、そこからは紅蓮の雷が紫電を相殺するべく放たれる。

しかし、牙煉は両手で手数を増やして防いでるのに対して、出雲は片手で日本刀を持ち、突きを放っている。つまりは出雲にはまだまだ手数を増やすことは可能である。

出雲のもう一方の空いている手に霊力が集まり、球となす。

7色の螺旋の弾幕が放たれた。

「ぐふあっ!？」

ついに出雲の攻撃はまともに牙煉の体を直撃した。

弾幕の雨は止むことを知らぬかのように吹き飛ばされた牙煉の体を容赦なく襲い続ける。

「ぐう……」

牙煉は、自分が纏う紅蓮の雷炎の密度を上げると、弾幕をそれで防ぐ。そして、両手を前に突き出す。

「紅蓮の二重奏」

紅蓮の炎と雷が捻じれ、編まれるように一個の巨大な砲となって出雲に襲い掛かった。

「……………おいおい。大自然の怒り」

出雲も両手をかめはめ波を横にしたように前に突き出してそこから術をたたき出す。

中央に細いマスタースパークのようなレーザーが、その周囲には竜巻が。さらには周りに雷がまとわりついている。

牙煉の『紅蓮の二重奏』と出雲の『大自然の怒り』が拮抗する。

これは爆発などせず、力の全てが拮抗しているポイントから周囲に散らされる。

「「でやあああああああ」」

二つの力はより強大なものとなってぶつかる。お互いの最後の力を全力で搾り出したエネルギーが空間にゆらぎまでも作り出す。

「ラストオオオオオオオオオオオ」

すでにもう空になったと思われていた二人の力がさらにまし、ぶつかる。

が、突如その拮抗は崩れた。

ほぼ同時に牙煉と出雲は倒れた。

一瞬だけ先に……………牙煉が先に……………。

鬼たちの営み

「結局この山で一番強いのは出雲か」

「らしいな。葉華はどうだった？」

「四天王第4位だって」

どうも、葉師出雲だ。一昨日の宴以来、序列が変わった。最後まで立ってたやつが強いってことなただけだな。

で、いつもどおり葉華の家で酒を飲んでるんだが・・・・・・・・・・

「なんでこうなった」

どうやら葉華の家を増築して、これ以降も同棲しなさいということらしい。

別に結婚したとかそういうわけじゃないんだけどな・・・・・・・・・・多分の話だが、この屋敷には四天王が二人と俺がいることになる。

俺が暴走すれば、鬼のメンツが揃うまで四天王が時間稼ぎ。もし人が攻めてくれば俺たちが防波堤といったところだろう。

まあなんともいい位置にこの屋敷もあったもんだ。ひとつの屋敷なのにかくさんの役目を果たしてやがる。

あ、そうそう。鬼神にはまた牙煉がなった。

俺は鬼じゃないから関係ないし・・・・・・・・。

どちらにせよ、自由に使っていいたいから土地は自由に使う。せっかく自然を使いこなせる能力なんだから畑でもやってみようと思う。一応野菜の種はもらってきたから、いつでもできる。俺は能力を使えば季節とか関係なく自由に作れるからな。

だってその座標の気温変えてやればいいだけだし。

あ、でもビニールハウスみたいなのがあつたほうがやりやすいんだけどな・・・・・・・・。。

まあ無い物ねだりしてもしようがないから木で小屋でも作れば事足りると思う。

多分だけだな・・・・・・。

ふう、しょうがないか。

「葉華、あっち側木を伐るぞ」

「勝手にしろ・・・。まったく、お前が来てからというもののいろんなものが急激に変わっていくな」

「いいことだと思え」

「それでも思わなきゃ心がもたんわ」

どうやら俺が言う前からそう思っていたらしい。

なら何と言おうが変わりはないか・・・。

「まあできたらうまい野菜を食わしてやるさ」

「・・・。そちらの件は楽しみにしておこう」

花より団子・・・、か。

色気より食い気だな。

まあこのくらいの子供ならしょうがないか。

あ、でも俺も楽しみだからまだ子供なのか？魂は肉体に引っ張られるらしが・・・。俺は大体18〜19ぐらいのはずだよな？子供じゃないし。

そこが男子と女子の違いか？

そこまで重要なことでもないしどうでもいいか。さて、木を伐って小屋作って野菜を作るとするか。

「ふう、これでいいか」

小屋が4つ巨大な屋敷の隣に出来ていた。

それぞれが違う季節の温度になっており、擬似ハウス栽培を完成させている。

そしてなかには既に種まきを終え、既に野菜が芽吹いている。

ちよっとずるいが、能力で成長を早くしてみたのだ。もらった種の

数は少なめだったので、種を増やすための育成を始めた。というより最初からこれができると思ってたくさんはもらわなかったのだが・・・。

「お疲れ様」

「葉華・・・ん？ここ最近美月を見ないけどなんかあったか？」

この前屋敷に帰ってきたときも見なかったな。宴のあとのことな。それ以降も帰ってきたところを見たことがない。

もしかして・・・。

「俺は避けられてるのか？」

「いや・・・あいつなら鬼神様のところだ。にしてもなぜ美月のことが気になるのだ」

葉華は少し過剰とも言える感じで出雲に詰め寄る。

しかし、出雲は全くそんなことにも気がつかず杯を仰いだままその質問に答える。

「いや、一応は同居人だからな」

「そ、そうか・・・」

そんな葉華の様子を見ても出雲は結構友達思いだな、程度にしか感じていないのだが・・・。

「あいつは鬼神様のことが好きだからな」

「ぼふおおあつ、ゲホツゲホツ」

出雲は意図せずに聞いた鬼神の浮ついた話に、酒でむせ吹き出す。そして、その噴射された酒は葉華の顔に直撃する。

「むぎやあああ」

葉華は葉華で女の子としてはどうなのかと思われる声を上げる。

「す、すまん」

「知るかあ」

バシィィ

こ気味のいい打撃音が出雲の頬から響いた。

暗雲漂ふ山

どうも、もう700年ぐらい生きている薬師出雲だ。

あの時の宴から早いもんでもう50年。

人里は明治時代ぐらゐまで発達している。

普通そんなに早く発達できるものなのかと思い、鬼たちに訊いてみたところ、盗み聞きをした結果から天才が俺がこの山にくる11年ぐらゐ前に生まれていたらしい。その娘は何でも銀髪だったとか・・・・・。

永琳じゃないよな？

バカだったし。

で、その娘は何十年も前から新しい物を作るのをやめたが、それほどほぼ同時に新たな天才が生まれ、その数年後からその天才を中心に新しい物を作っているとか。

新たな天才は妖怪殲滅派で、昔からいる天才は妖怪共存派らしい。

どちらも何十年も前から生きているが一切老けていないとか。

盗み聞きによるとりあえずの情報収集によると、新しい天才は自身の能力で。

昔からいる方は薬を飲んでいる。

また、彼らだけでなく、人里の者たちが老けるのは人としてはともかくおそい。多分、長命なタイプの人類であり、人里の中に『時』、もしくは『歳』に干渉できる能力を持っている者がいると考えられる。

まあ、それはともかくとして、俺は今、人里とは逆方向の山の麓に來ている。

こっちの方には、山からそう遠くないところに大きな川がある。俺が居るほうは人里より遠くに行かないと大きな川がないんだけどな・・・・・。

小川というのにも値しない小さな水の流れならたくさんあるのにな。

それに、こっち側は妖怪がたくさんいる。見渡す限り、さらにはもつと遠くまで妖怪の領域だ。行ったことはないが、遠きに天狗の里もあるらしい。数だけなら鬼よりも圧倒的に多いものの、個々の戦闘能力は逆に鬼が圧倒的な強さを持つ。なんて聞いたが、それはあくまで鬼側の視点なんだから実際のことは俺は知らない。

そんなことはどうでもいいとして、俺は麓の川で釣りをしている。一人じゃないぞ。鬼神こと牙煉も一緒にだ。1人でなんか寂しかったから昔釣りに誘って以来、牙煉が釣りにはまって逆に誘われるようになった。あくまで食べる分しか釣らないけどな。

でも、魚がかかるまでボーっとしたり、のんびりと牙煉と話したりするのが楽しいから飽きない。たまに葉華と来るところは問屋がおりさない。騒がしくなったり、どこからか（川からだけど……・）河童を連れてきて酒盛りを始めたりとやすらぎというものが無い。その酒盛りで食われる魚は俺が釣った魚だ。まあ、食べないよりはましか……。

「なあ牙煉」

「なんだ？」

「お前好きなタイプの女性とかないの？」

ふと先ほど思い出した。そういえば美月ば牙煉のことが好きなのだと。だから手助けになりそうな情報でも調べとくか、と思い訊いてみたのだが。

「好みの顔とか性格は無いが……。しいて言うなれば体つきか」

「黙れ変態」

「誰が我一人変態だと？男など皆変態だ。お主とてわかるだろう。ボンッ、キュッ、ボンッ。だったか？最高だと思わぬか？」

「思わぬーよ」

牙煉ってこんなおかしなキャラだったか？
まあいいか。別にこれまでと大差ないし。

「で、お主はどうなのだ？例えば葉華あたりとか」

はあ、下手に話題を振ったら返してきやがった。

にしてま、葉華・・・ねえ・・・。

「美人だとは思うけどな」

「ほう、なら」

「結婚とかしないぞ。俺はもう700年近く生きているじーさんだ。そういった感情を永く一人で生活してきた影響で、俺は失っているし、葉華だって別に俺のことをそういった意味では好いてはいまい」

「・・・・・・・・・・。頑張れ葉華」

「なんか言ったか？」

「何でもない。帰るぞ」

「はいはい、帰りますか」

2人は、能力と霊力、魔力や妖力を利用して空を飛んで山へ帰っていった。

「鬼神と思しきものの発見。人間と一緒に暢気に釣りをしていた、と。

また、空を飛ぶことも可能。さて、こっちめ帰りやすか」

羽を生やしたものが、書物を手に、山から高速で離れて行った。

空廬けし者と妖怪の王者

「出雲は居るか？」

「鬼神さま、出雲なら野菜小屋におりますが」

「そうか・・・」

「例の件ですか？」

「葉華は間が鋭いな」

「女子とはそういうものです。良いのですか？例の件に出雲を巻き込んでしまつて」

本邸の玄関口に二人の強き鬼が対峙している。とはいえ、争いではないので普通の会話をしているが、二人の顔は、鬼のよくあるおちやらけた感じは一切感じられない。それどころか少しピリピリしているようにも感じられる。

「あやつとてこの山の住人だ。そのうち巻き込まれるだろうし・・・。あいつが戦闘の爆音を聞いたまま黙ってられると思うか？」

「いえ・・・。それは、無理ですね」

「だろう」

ピリピリしていても笑を忘れない。それが鬼の信条なのだろうか？いつもと同じように多少は顔に笑みを浮かべる。

それでも何かが引つかかっているような不自然な笑みに葉華はなつてしまっているが・・・・・・。

「野菜小屋だな」

「ええ、そちらにいなければわかりませんが」

「ふん、あの男は自由そのものだな」

『鬼神』牙煉はそれだけ言うと言関から出ていく。

残された葉華と言えば・・・。

「私たちは大丈夫なのだろうか・・・」

どこかくらい表情を浮かべていた。

何かとてもひどいことを知ったかのような・・・・・・。

「出雲っ」

春の野菜小屋に牙煉は扉を開けつつ、出雲を呼ぶが……。返事はない。どうやらここではないようだが、隣の小屋から声が聞こえたところから考えると、夏の野菜小屋にいるようである。

「まったく……。ここでとれた野菜はうまいがいざ訪ねてくるとなると面倒だな」

牙煉は徳利を持っているわけでもないのに呟いていた。

「で、なんの用だ？ 牙煉。明日は例年の宴の日だろう。なにかルルが増えたか？」

ノックをして入ってきた牙煉が中を見ると、出雲は頬に土をつけたりしながら雑草を抜いていた。

「いや。出雲、問題が発生した」

「…………ふざけているわけじゃなさそうだ。何があった」

どうも、老体にムチを入れて体を動かしている（嘘）薬師出雲だ。小屋で気分良く雑草取りをしていたんだが、牙煉の邪魔を受けた。とかふざけて言ってやろうとか一瞬思ったが、こいつがまどっている重苦しい雰囲気からどうやらふざけている場合じゃないらしい。

鬼であるこいつらが、問題を俺に言ってくるということは鬼内部だけの話ではすまないということ。

つまりは、この山に何かがあったか、人里で何かがあったかのどちらかになる。

で、可能性的には……。

「人里がまた発展でもしたか？」

「違う。この山の問題だ」

………。そりゃあ、こっちにとっても死活問題だ。

人里の発展も同じだが、攻めて来られたときはいざとなれば逃げればいい。

だが、この山の問題となればそうはいかない。

でも山に何か起こったとは思えんし……。

「ほかの妖怪でも攻めてくるのか？」

こっちは逃げるわけにはいかないからな。妖怪の種族の序列が変わってしまう。

今は鬼が負けなしだから最強の地位を手に行っているが、戦わずして逃げでもすれば一番下にでも落ちるだろう。

序列が上ならば堂々と土地を歩いてられるが、したならば隠れていなくてはならない。

奴隷のように扱われる場合もあるからな。まあ、鬼に対して、相手が一人であったとしてもほかの妖怪がそんな扱いできるとは思わないけどな。だって死ぬし。鬼に殺されるから……。

「ああ、天狗の大集団だ」

「おいおい、そりゃまたずいぶんと大きな勢力が来るもんだな」

天狗の勢力……。

鬼に次ぐ力を持った勢力と言われている。

個々の力では鬼に負けると言われるが、数は鬼が1000ちょっとしかないのに対して6000以上はいるらしい。

また、天魔と呼ばれる天狗最強の王者は鬼神にも匹敵する力を持つ。大天狗と呼ばれる10名は鬼の四天王と匹敵するとか……。

。

「明日の宴に参加すると、我々が勝てば山をよこせと言ってきた。どうやら我らこの山の最強は我だと思われているらしくてな。我に書状を送りつけてきたが、おぬしの方が強いからな。一応知らせには来たぞ。あとはおぬしが山を去ろうが戦いに参加しようがしなからうが自由だ」

「・・・・・・。その場になって決める。野菜、持ってくかい？」

「いただこう」

『鬼神』大雉牙煉は野菜を片手に自分の屋敷へと帰っていった。

翌日・・・・・・

「出雲は来なかったな」

「葉華・・・・。しょうがないよ、あいつは人間だよ」

大量の妖怪。鬼と天狗が対峙していた。

しかし、鬼の側には河童の姿は見られるが、出雲の姿は見られない。

「葉華殿、美月殿。そろそろ始まりますぞい」

二人の四天王の裏から年老いた鬼が声をかける。

「「じい様。すいません」」

「大丈夫じゃ、我ら四天王がおれば勝てるわ。あんな軟弱妖怪共などな」

どうやら、この老人も四天王の一人らしい。

あとひとり、鬼神の横で瞑想をして浮いているが・・・・・・。

「開戦っ」

鬼神の一声で二つの勢力はぶつかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9047y/>

東方薬師見聞録

2011年12月5日22時49分発行